

フィジー伝統木造建築ブレの継承可能性に関する研究 —CATDのブレ再建プロジェクトを通して—

金井 健浩

キーワード： フィジー、伝統木造建築ブレ、適正技術、伝統技術、共同労働

1. 背景と目的

フィジー共和国（以下、フィジー）では人口の約60%が農村部で暮らし、マタンガリ（*Mataqali*）と呼ばれる氏族をひとつの単位として共同生活を営んでいる。フィジーには、ブレ（*Bure*）と呼ばれる伝統木造建築があるが、近年では建設されることは少なくなっており、フィジー関係者からも早急にブレに関する記録を残し、新しい世代に伝える必要があるといわれている。そこで現在、適正技術開発センター（Centre for Appropriate Technology and Development、以下CATD）と本研究室（人間環境設計論分野）が共同で、ブレの保存に関する調査研究プロジェクトを実施している。プロジェクトにおいて筆者は、CATDにおけるブレのモデル建設の準備と材料採集・建設工程の記録に携わった。本研究は、CATDにおけるブレ建設の意義の整理、プロジェクトにおけるブレのモデル建設の記録、関係者へのインタビュー調査の3点を軸に、フィジー農村部におけるブレの継承可能性について検証することを目的とする。

2. ブレ再建プロジェクトの経緯

CATDは近代における技術だけではなく、地域に適した技術の教育を行っている。土地の気候風土や材料工法、その土地に住み続けてきた人々の歴史、文化と密接に関係する伝統建築における技術は、地域の適正技術として継承されていくべきものである。本プロジェクトはCATDのセンター長ボラ氏が若者へのブレの教育・フィジー農村部におけるブレの継承を目指して実施された。

3. ブレ再建プロジェクトの記録

ブレ再建プロジェクトにおける建設の準備、材料採集、建設工程・建設技術を記録として残し、ブレ建設に必要な農村部における慣習、建設における共同労働の一端が明らかになった。これらはブレ建設のマニュアル作成に役立つとともに、今後のフィジー農村部におけるブレ保存活動の一助となり得る。

4. 建設関係者へのインタビュー調査

プロジェクト関係者へのインタビュー調査結果をまとめ、分析を行った。継承に必要な3つの地域資源のうち最も状況に差が激しいのは知的資源であり、継続したブレ建設が知的資源の充実に繋がることが分かった。また、ブレ建設の需要を産み出すためにも、観光客に目を向けたり、近代的な技術を取り入れる必要があることが明らかになった。更に、プロジェクトを通して関係者のブレへの関心が向上し、地域においてブレが継承されていく可能性が示された。

5. 結論

先住のフィジー人は今も、地域で生まれ、受け継がれてきたアイデンティティを携えている。本研究はプロジェクトを通じた一面的な部分もあり、各地域におけるブレの継承可能性については個々の事例を精査していく必要がある。しかしその中でも、本プロジェクトにおいては外部からの影響がきっかけで自らの伝統の持つ価値の再認識に繋がり、主体性を持った伝統継承への取り組みが行われた。それは、ボラ氏を中心とした関係者の強い思いがあったからだと考えられる。今後、フィジー農村部がボラ氏のようにブレの継承を強く望むならば、潜在的に持っている技術や知恵を活かし、伝統木造建築ブレを継承していくことは十分可能であると考えられる。